所感

古市公威

自分は學士會の初期に委員として會計のことなどを預つて居り多少關係して居つたのであるが何分二十有余年前のことであるから判然したことは唯今覺えて居らぬ。尤も當時は會も甚だ振はなかつたので毎度富士見軒で催した委員會にても嘉納君の柔道の話しなどが專ら席を賑はしそれが面白くつて皆が寄り合つた位のものであつた。そこで折角會は出來たものゝ格別の仕事もないので斯樣の會は潰して仕舞つた方がよいといふ議論も出て或る時會の席上で高田早苗君が一同から演說を所望せられて無理遣りに立たせられた揚句盛んなる會無用論をやつたことがある。併し自分は飽く迄この論には反對を唱へた。それは一つは其頃自分が土木局に奉職して居つたからよく地方へ出掛けたものであるが各地方に散在して居る學士の人々——無論其頃は甚だ其數の乏しかつた——學士の人々に接して此等の人々がお互に其消息を知り合ふ手段としてどうしても中央に一の機關が必要であるといふことを深く感じて居つたからである。自分が廣島へ出張したとき彼地で廣島學士會が開催せられ席上東京では學士會を解散しやうといふ論があると述べたところそれは以ての外であるといふて一同で反對の議決をしそれを自分が東京の事務所の方へ報告をしたことなどもあつた。